

『今月の天候と農作業』

通巻第5560号
10月号
平成25年 10月 4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、期間の前半は、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<1週目の予報> 10月 5日(土)～ 10月 11日(金)

台風第23号や湿った気流の影響で、雲が広がりやすく雨の降る日があるでしょう。

※詳しくは、週間天気予報をご覧ください。

<2週目の予報> 10月 12日(土)～ 10月 18日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、南からの暖かく湿った気流の影響を受けやすいため、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 10月 19日(土)～ 11月 1日(金)

高気圧と低気圧の影響を交互に受け、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稲

稲刈り時期は慌ただしくなり、コンバイン等の大型機械や刈払い機などを扱う機会が多くなりますが、一瞬の油断や操作ミスが事故となります。作業の前には機械類の整備点検や、路肩やほ場入口の補修、ゆとりある作業計画を組むなどして、事故防止に努めましょう。

1 適期収穫

ヒノヒカリでは収穫作業が始まりましたが、収穫適期は、全籾数の8割程度が黄化したときで、ほ場ごとに籾色をよく観察し収穫しましょう。倒伏したところでは茶米や穂発芽等が発生している場合がありますので、刈り分けを行い全体の品質が低下しないようにします。大雨や台風などで水田にゴミが流入していると、収穫機械の故障などトラブルが発生しますので予め除去しましょう。熟期の遅いまいひかりの収穫は今月下旬となりますので、収穫5日前までは間断かん水で根の活性を保ちます。

2 適正な乾燥調整

生籾を高温で急激に乾燥させると胴割粒が発生し品質が低下しやすくなります。また、過乾燥だと収量減や乾燥コスト増にもなります。熱風温度40℃以下で、毎時の水分減少率は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにしましょう。

なお、複数の品種を扱う場合は、収穫・乾燥機械や運搬する袋類などの清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

◆大豆

1 排水対策等

子実肥大期にあります。ほ場内に水が溜まらないよう排水溝を整備しましょう。逆に晴天が続く干ばつが心配される場合は、子実が十分肥大しないことがあります。水の確保される所では畦間に走り水を行い、品質の良い大豆を生産しましょう。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウの発生が多く、葉の食害が見られます。カメムシは生育後期まで加害し、被害が激しいと株は収穫時期になっても青立ちのままと

なります。ほ場を観察し農薬基準を遵守し遅れないよう防除を行います。

◆ ソバ

ソバは湿害に弱い作物ですので、排水溝を設けて排水を徹底します。特に水田では水が停滞し生育が悪くなりやすいので、遅れないように必ず実施しましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機の整備・点検を行うとともにダクトの設置など、いつでも稼動可能な状態にします。またハウス内の二重ビニルの被覆が終わっていないほ場では、早目に作業を終え、いつでも保温ができるようしっかり準備を行いましょ。

暖房用燃料の節減には、ハウス内の気密性を高めることが重要となってきます。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認を行いましょ。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょ。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期、側枝の発生から収穫期となります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘心が遅れないよう注意します。

追肥は、生育が順調な時期から行いますが、1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょ。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分光りにあて、本葉2.5枚以降は昼温25℃前後、夜間は14℃を下限に管理します。

◆ ピーマン

促成ピーマンは整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりが年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意を要します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

◆ トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失わないよう注意してください。

◆ いちご

今年は、9月に入り、いちごの花芽分化に適した気温で推移しており、頂花房の発蕾は10日前後が予想され、同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10㎡当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用します。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ キャベツ・レタス

キャベツは播種後120日から150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは、12月出荷の定植期にあたり、2～3月出荷の播種期となります。生育適温は15℃から20℃ですので、本ぽでは12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

◆ たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型の播種期となります。播種床には、10㎡当たり完熟堆肥40kg、苦土石灰1.5kg、低度化成2kg程度を施用し中旬までに播種してください。

◆ しょうが

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫期に入ります。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆ 食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大によりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

◆ さといも

中生種の収穫期となります。「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使用を避けてください。

◆ ほうれんそう

加工用では厳寒期に収穫する作型の播種期となります。地力の高い排水の良いほ場を好むので、良い条件のほ場を選定します。また、除草剤を利用する際に土壌が乾燥した状態では効果が劣る場合があります。播種後適度なかん水を行い、適湿の状態ですら除草剤は散布します。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花の減少がみられるので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょう。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

今年は園地や樹によって結果量にばらつきがあります。結果量が少なかった樹では、翌春の着花量が多くなり、隔年結果が激しくなります。10月中旬頃から夏秋梢の整理を行い、翌年の着花数を調整しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、7月と8月の花が結実している園が多く見られ、平年よりも果実肥大が遅れています。平年よりも早めにビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は外気温よりも3℃程度高い温度で加温することで、果実肥大を確保しましょう。

◆ マンゴー

今年は昼間の温度が高く、第三新梢の発生が多く見られます。第三新梢が発生した園地では、枝、葉の緑化不足により、花芽の着生が悪くなるので、上、中旬に第三新梢の新葉の除去を行いましょう。その後の新梢の発生を抑えるために、施設を開放し、できるだけ外気温に近づけるように管理し、かん水は少なめにしましょう。ヒートポンプを導入している園地では、夜間冷房を行うことで、新梢の発生を抑制し、花芽分化を進めることができます。

最近、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝や切り口に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因です。ハウス内の放飼の密度を下げるため、加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除き、胞子の発生した切り口を切り戻して、ゆ合剤を塗布しましょう。炭そ病対策と併せて、施設内の剪定残さは全て施設の外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆ 礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆ くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり、翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 花き全般

10月に入ると夜温が低下してきます。特に中山間地域では急激に低下し、降霜による被害の恐れもあります。病害防除の観点からも微生物農薬のダクト散布が実施できるように保温・加温の準備を早めに行ってください。

◆ キク

秋ギクの主力品種である「神馬」は、10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延をおこす危険性があります。特に10月以降に定植する作型については、定植直後から低温に遭遇する恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

「神馬」は系統によって生育ステージ毎の適正な管理温度が異なりますので、栽培する系統に適した温度管理を確認しましょう。

導入から数年経過している蛍光灯については、花芽分化の抑制に必要な光量に足りない恐れがありますので、毎年光量を確認し、適切な時期に交換を行いましょう。

◆ スイートピー

今月の中下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさなどから判断を行っ

て下さい。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しやすい時期になりますので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に気を配りましょう。

◆ デルフィニウム

中山間地では8月定植分の本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下し、2番花の萌芽に影響しますので、適宜かん水や液肥の施用を行いましょう。適期の切り前で収穫し、収穫後の前処理は品質保持剤の濃度、処理時間を厳守し、花落ちのない切り花を出荷しましょう。

平坦地の9月定植分については中旬頃に発蕾が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行って下さい。

◆ トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなり切り花のボリュームが低下するので、十分にかん水しましょう。また、心つぶれや葉先枯れの発生しやすい品種については、草丈が10センチ前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促します。

追肥が後半にずれ込むとブラスチングの発生につながりますので、初期重点の追肥になるように液肥を施します。

今月に定植する作型では、活着を確認したら、光線不足により生育が遅れないようすみやかに遮光ネットを除去して下さい。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

10月に入り、家畜にとって過ごしやすい季節になりました。朝夕の寒暖差が大きいので、子牛、子豚、幼雛は換気と保温に注意します。敷料が濡れたままだと、畜体の腹部が冷え下痢を発症しますので、乾いた敷料をこまめに取り替えるなどして下さい。

牛床にたまったふんからは、アンモニアなどの有毒ガスの発生がおき、

呼吸器疾患などを引き起こします。牛床のこまめな清掃を行いましょう。

乳牛に関しては、10月に入っても暑熱のストレスを受けています。日中は温度が上がるので、ヒートストレスメーターの温湿度指数が67（ヒートストレスメーターの黄色い部分）を下回るまで、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けましよう。

養鶏では冬場の鳥インフルエンザに備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行います。入り口の消毒、畜舎周辺の石灰消毒など徹底ましよう。

養豚の活性汚泥処理施設は気温の低下とともに活性が悪くなりますので、余剰汚泥の処理を実施し、希釈水量、曝気量、曝気時間など調整まします。

◆ 飼料作物

配合飼料価格については依然として高止まりましています。経営の安定的持続のためにも、良質な自給飼料の確保に努めて下さい。

飼料イネの普通期栽培については、ホールクロップサイレージの収穫時期を迎えます。脱粒に注意し、適正水分60～65%に予乾させ、すみやかにロール・ラッピングまします。降雨直後は、水滴や土壌が茎葉に付着まします。水分の上昇や土壌の混入は、品質の低下を招くばかりでなく、カビの発生にもつながります。しばらく晴天が続いてから収穫するようにして下さい。

(小坂 昭三)

特用作物

◆ 茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて、芽揃いが良く摘採が3日程度早くなる反面、冬期の凍害や晩霜害を受けやすいため、茶園の立地条件や栽培品種等を考慮して実施まします。

① 整枝の時期

秋整枝は、平均気温が18～19℃以下になる頃を目安に行い、山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年は、秋冬期の高温の影響で秋整枝後に再萌芽する場合がありますが、30%四方内の再萌芽数が二十芽以下であれば、収量・品質への影響はないとされていますので、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足を招かないように注意しましょう。

② 整枝の高さ

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から3～5%上で、葉層を8%以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の二回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

2 病害虫の防除

今年は、カンザワハダニが多発している茶園が見られますので、秋整枝後の防除や冬期防除を実施し、越冬密度の低減を図りましょう。

また、近年暖冬や少雨に伴い、クワシロカイガラムシの第四世代の発生が見られますので、多発している場合には防除を実施しましょう。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 ほだ木の水分管理

9～10月は、原基の形成が盛んになる時期です。この頃の原基づくりが春子の発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

2 ほだ場の環境整備

しいたけ発生量の増大や品質向上のため、ほだ場の環境整備を行います。暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にしましょう。また、風の強いほだ場や乾燥しやすいほだ場は、きのこの変形や発生不良を起こすので、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

3 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域であっても、その年の気象条件や立地条件（日照、標高等）によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

本年の通常期販売が来月で終了となります。未出荷の方は、出荷まで適切な貯蔵管理を行うようお願いいたします。

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 来年作の準備として、日当たり・風通し・排水の良いほ地を早期に選定しましょう。新作地、借地については、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施して来年作の施肥設計の参考にしましょう。

2 土壌病害対策のため、夏期・冬期の深耕、耕耘作業は土壌菌密度の低下を図るための重要な作業となります。特に後作の無いほ地については、重点的に耕耘を繰り返し行い耕種的防除に努めましょう。

3 良質堆肥10㎡当1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を十分に確保し、未熟堆肥投入を防ぐため、定期的に切り返しを行い腐熟促進に努めましょう。切り返しは適度な水分状態（50%前後）を保ちながら月一回程度実施して下さい。

4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫、作業場の整理整頓・掃除機による清掃を行いましょう。

(松元 貴光)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

かんしょの新品種

近年品種登録され、宮崎県において普及の期待されている2品種についてご紹介します。

◆ 食用の新品種（べにはるか）

「べにはるか」は、いもの外観が優れる「九州121号」を母、いもの皮色や食味が優れる「春こがね」を父とする交配組合せにより九州沖縄農業研究センターで育成された品種で、芋の形状は下膨れ紡錘、外皮は紫色でヤニが付着していることが多いといった特徴があります。食味は収穫直後は粉質ですが、1ヶ月程度の貯蔵で粘質に変化します。肉色



は鮮黄色で緑変が少なく、食味は非常に甘く、しっとりとした食感で、香りも華やかです。良食味品種に位置づけられ、食用を中心に全国で産地化がすすんでいます。県内の量販店でも見かける機会も増加しており、小林市や綾町等で栽培が始まっています。

◆ 焼酎原料用の新品種（コガネマサリ）

「コガネマサリ」は「スターチクイン」(母)と「九系236」(父)を交配育成された品種で平成24年に九州沖縄農業研究センターから品種登録出願されています。収量は「コガネセンガン」と同程度で、ネコブセンチュウや黒斑病といった病害虫に強く、でん粉含有量が1割程度高いのが特徴です。いもの形状はでこ



こぼが少ないため加工時に洗浄しやすく、貯蔵性にも優れます。アルコール取得量が高く、蒸し芋のさばけが良い等、加工適正にも優れます。県の食品開発センターでの醸造試験の結果は良好で、県内の複数のメーカーで試作品が開発されており、特に麴米に「県産ヒノヒカリ」、「コガネマサ

り」と「平成宮崎酵母」を使用したオール宮崎にこだわりぬいた製品も誕生しており、数年後にはいくつもの銘柄の焼酎が誕生するものと思われます。「コガネマサリ」という名前には「コガネセンガン」の病虫害抵抗性や貯蔵性の弱点を克服し、「コガネセンガン」に置き換わる芋に育てたいという育種に携わった関係者の強い願いが込められています。今後はこの名にふさわしい製品の開発を支援し、従来品との差別化により「コガネマサリ」の普及を進めていきたいと考えています。

(河野 健次郎)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫※	やや多	幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨で圃場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯れ病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小昆虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小昆虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。 ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)が、一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、現在未発生の地域でも注意が必要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)	— —	
いちご	炭疽病※、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、苗からの持ち込みにより、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後に多発するため、定植前に防除を徹底し、本ぼに病害虫を持ち込まないように注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病※ ミカンハダニ	やや多 やや多	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発現防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki です。</p>			